

# 共同研究の概要と経過

## 関沢まゆみ

### 一 共同研究の概要

本報告書は、戦争体験者の高齢化が進むなかで実施された本館の博物館資料調査（二〇〇三年度・〇四年度）の報告書『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』一〜四（二〇〇四年・〇五年刊行）によって得られた資料の整理を通して、約六〇年に及ぶ戦後史の中で、戦争体験に関する情報がいくつかの時代ごとどのように記録され、また語られてきたか、その時代推移とともに、書かれる記憶と語られる記憶の表出のされ方についての分析を行ない、戦争体験の風化の問題などもあわせて考察を進めることを課題としてかかげた共同研究の成果報告書である。

この共同研究は、先行して提案実施した『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』からの一定の継続性と取り纏めの必要性とを考慮してエントリーし実施したものである。そして、戦争体験者の体験年代によるそれぞれの戦時体験の個々の事例の時系列的な位置づけやまた戦後の体験記の刊行状況にみる一定の傾向性などの確認が行なわれた。

また、戦時中の記録として、これまで翻刻されていなかった第一次資料の翻刻を行ない、解題を付して簡易製本し、『翻刻資料集』三巻を刊行した。『皇國之礎』（解題荒川章二）と『第二次世界大戦終末』（細田

與一著・解題横山篤夫他）を『翻刻資料集』一（二〇〇四年度）として刊行し、東筑摩教育会作成『神社誌』（解題伊藤純郎）を『翻刻資料集』二（二〇〇五年度）として刊行し、静岡県磐田郡袖浦村（現静岡県磐田市）出身の上海事変出征兵士による軍事郵便等一三四点（解題荒川章二）を『翻刻資料集』三（二〇〇六年度）として刊行して、共同研究員をはじめ広く活用をはかった。

さらに、本基幹研究に関連して、二〇〇五年度には国際研究会「戦争体験の語り―外国人研究者の視点を中心に―（イスラエルのケーススタディ）」を、二〇〇六年度には日本学術振興会の助成を得てJSPS国際研究会「戦争体験の記憶と語り」を開催し、日本における戦争体験者の語りの特徴を分析する一つの機会とした。

### 二 共同研究の経過

#### （一） 研究課題

「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」

#### （二） 実施期間

二〇〇四年度〜二〇〇六年度

(3) 研究組織 (◎は研究代表者)

粟津賢太 創価大学文学部

伊藤純郎 筑波大学大学院人文社会科学研究所

今井昭彦 埼玉県立熊谷女子高校

大本敬久 愛媛県歴史文化博物館

河野 仁 防衛大学校人文社会科学部

坂井久能 神奈川県立神奈川総合高校

西村 明 鹿児島大学法文学部

藤井 昭 元広島女学院大学

本康宏史 石川県立歴史博物館

横山篤夫 関西大学

荒川章二 静岡大学情報学部(本館・客員教員)

新谷尚紀 本館・研究部

◎関沢まゆみ 本館・研究部

飯田瑞穂子 本館・リサーチアシスタント(二〇〇四年度)

大庭大輝 本館・リサーチアシスタント(二〇〇五～〇六年度)

(4) 研究経過 ( )内所属があるのはゲストスピーカー

第一回研究会 二〇〇四年五月二二日(土)・二三日(日) 国立歴史民俗博物館

関沢まゆみ 基幹研究の趣旨説明

「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」の活用について

分担課題の検討

第二回研究会 二〇〇四年九月二五日(土)・二六日(日) 国立歴史民俗博物館

俗博物館

河野 仁 「戦争体験の意味解釈と歴史社会学的方法論について」

伊藤純郎 「戦争」に関する研究動向―一九八〇年代以降を中心に―

荒川章二 「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」一・二から見えるもの

関沢まゆみ 「帰還兵士と戦友・戦没兵士と遺族―『戦争と死』の社会化と個人化―(戦争体験の記録と語りに関する資料調査一・二の分析より)」

宇吹 暁 「原爆被爆者手記と証言活動」

高野和彦 「広島平和記念資料館副館長」

前田耕一郎 「市民の描いた原爆の絵の収集・展示利用について」

高橋昭博 「被爆体験記等の収集・活用状況について」

直野章子 「被爆体験」

第四回研究会 二〇〇五年一月二九日(土)・三〇日(日) 国立歴史民俗博物館

Eyal Ben-Ari (クブライ大学教授)

The "Memory Boom" and Scholarship in Japan: Perspectives of an Outsider

直野章子 (日本学術振興会特別研究員)

「沈黙に耳を澄ます―『原爆の絵』作者への聴きとりから―」

佐藤雅也 (仙台市歴史民俗資料館学芸員)

「戦争の民俗―戦争体験の記録と語りをどう記述するか―」

伊藤純郎 「戦争と氏神―長野県東筑摩教育会『氏神信仰調査』と『神社誌』―」

「神社誌」―

新谷尚紀 「戦争研究と民俗学」

飯田瑞穂子 「戦後における戦争体験記の出版状況について―『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』一〜四―」

第五回研究会 二〇〇五年五月二二日(日)・二二日(土) 国立歴史民俗博物館

俗博物館

許元 (西原大学校韓国教育資料博物館館長)

「植民地時代における韓国教育の風景―資料を通じて見る植民地時代韓国教育の風景―」

横山篤夫 「戦没者の遺骨と陸軍墓地―六〇年後の遺族の聞きとり資料から―」

資料から―

西村明 「戦争と宗教研究」

大林浩治 (金光教教学研究所)

「信仰営為と銃後生活体験談・実践談への問い」

第六回研究会 二〇〇五年六月二五日(土)・二六日(日) 国立歴史民俗博物館

俗博物館

E. ロコバント (東洋大学教授)

「靖国問題の概略」

粟津賢太 「集合的記憶をめぐる研究動向―欧米の研究動向を中心

に―」

本康宏史 「『戦争と神社』をめぐる研究動向」

坂井久能 「『葉山町戦没者遺族台帳』の調査報告」

第七回研究会 二〇〇五年一〇月七日 学士会分館

マイケル・ルッケン (フランス国立東洋言語文化研究所教授)

「戦争記念碑のかけに」

第八回研究会 二〇〇五年一二月二六日(土)・二七日(日) 国立歴史民俗博物館

民俗博物館

本康宏史 「管内神社と地域社会―『軍都』金沢の事例を中心に―」

坂井久能 「管内神社等の創建」

同 「三浦郡葉山町における戦死者の記録」

伊藤純郎 「総動員体制下の神社―『敬神崇祖』の思想―」

大本敬久 「戦時期の戦争関係祭祀と地域社会」

粟津賢太 「欧米における戦争の文化史的研究」

藤井昭 「広島市周辺地域の『被爆体験』について」

横山篤夫 「戦没者の遺骨と陸軍墓地(二)―東京と大阪の忠霊塔建設と遺骨―」

塔建設と遺骨―

西村明 「戦争と宗教研究―学説史からのアプローチ―」

飯田瑞穂子 「戦争体験記の刊行―その高揚と停滞―」

工藤紗貴子 (総合研究大学院大学)

「『奈良県風俗志』にみる戦争関係の記述」

新谷尚紀 「『語り』と『記録』の資料論・試論」

関沢まゆみ 「『戦争と死』の記憶の個人化と社会化」

第九回研究会 二〇〇五年一二月一八日(日) 国立歴史民俗博物館

スヴェン・サーラ (東京大学助教授)

「ドイツと日本の歴史認識に関する研究」

河野 仁 「米国における第二次世界大戦関連オーラル・ヒストリー・プログラム」

「リー・プログラム」

第十回研究会 二〇〇六年四月一五日(土)・一六日(日) 国立歴史民俗博物館

俗博物館

菊池 実 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

「近代日本の戦争遺跡―戦跡考古学の調査と研究―」

今井昭彦 「忠霊塔建設について」

荒川章二 「兵士が死んだ時」

第十一回研究会 二〇〇六年九月九日(土)・一〇日(日) 国立歴史民俗博物館

俗博物館

ミニシンポジウム (詳細は『発表・討論要旨集』参照)

テーマ1 忠魂碑・忠霊塔をめぐる問題

本康宏史 「戦争慰霊碑研究の現状と課題」

横山篤夫 「『満州』の忠霊塔と大阪の忠霊塔建設」

粟津賢太 「忠霊塔と植民地経営」

今井昭彦 「忠魂碑・忠霊塔をめぐる―群馬県下の事例から―」

―

坂井久能 「忠霊塔の建設とその促進」

伊藤純郎 「忠霊塔と小学校」

討論

テーマ2 語られること・語られないこと

関沢まゆみ 「記録と語り―事実をどうつかまえるか―」

西村 明 「サラエボにおけるユーゴ戦と語りについて」

藤井 昭 「語られたことの公刊とプライバシー」

村山絵美 (総合研究大学院大学)

「沖繩戦の語り―戦死者のマブイ(霊魂)をめぐる

伝承を中心に―」

討論

調査報告

粟津賢太 「中国東北地方調査報告」

第十二回研究会 二〇〇七年三月一〇日(土)・一一日(日) 国立歴史民俗博物館

民俗博物館

「研究報告」投稿原稿の内容の発表

調査報告

西村 明 「グアム・サイパン調査報告」

### 三 海外調査

共同研究の最終年度の二〇〇六年度は、とくに希望者の参加による海外調査を実施した。その第一は、中国東北部の調査(二〇〇六年五月一九日～二三日)で、主な訪問先は、二〇三高地、東鶏冠山北堡壘、大連外語大学(大連神社跡)、労働公園(大連忠霊塔跡)、遼寧省図書館、遼寧省博物館、奉天神社跡、奉天忠霊塔跡、九・一八歴史博物館などであった。第二は、グアム・サイパン調査(二〇〇六年一〇月六日～一〇日)で、主な訪問先は、ジーゴ太平洋戦没者慰霊公園、アンダーソン米空軍基地、アサン太平洋戦争記念公園、グアム大学、バンザイクリフ・スーサイドクリフ、アメリカ記念公園ビクターセンター、南興神社跡、彩帆神社・香取神社跡、テナアン等スーサイドクリフ、日の出神社跡、テナアン神社跡、原爆搭載地などであった。グアム大学ではルービンシュタイン教授との研究交流も行なった。

#### 四 JSPS(日本学術振興会)の助成による研究集会

共同研究の二年目の二〇〇五年度には、この研究テーマに関連して研究集会「戦争体験の語り―外国人研究者の視点を中心に―(イスラエルのケーススタディ)」を開催することができた。研究集会では、戦争体験の語りについての資料論的な分析の可能性について検討した。日本の場合、戦争体験の語りについての調査や研究は一九四五年以前の戦争を対象として行なわれており、いわば過去の戦争を研究対象としているものといえる。それに対してイスラエルの場合、一九四八年の国家成立以来二〇〇五年の現在においても戦争が継続的な状態にあり、いわば現在進行形のなかたちで戦争が研究対象となっている。そこでこの研究集会では、戦争という国家的なことがらに個人がどのように関わっているのか、そしてその個人は国家や社会にどのように規定されているのか、という問題を検討しようとしているイスラエルの研究者を三名招聘した。研究集会では、「戦争・兵役・イスラエル社会」についてのイントロダクションの後、エフラート・ベン・ゼーブ(ルビン・アカデミックセンター・助教授)「一九四八年の戦争の記憶―パルマツハ退役軍人(イスラエル兵士)の証言―」、エドナ・ロムスキー・フェダー(ヘブライ大学・助教授)「戦争体験を自然なものとして説明すること―一九七三年の戦争のイスラエル退役軍人のライフヒストリー―」、イヤル・ベン・アリ(ヘブライ大学・教授)「イスラエルにおける兵役と男性の理想像―レバノン戦争(一九八二)とアルアクサ・インティファダ(二〇〇〇―〇五)を例に―」の三つの研究発表があり、最後にエビログとしてベン・アリ教授によって「イスラエルにおける戦争と語りの研究動向」について発表がなされた。彼らは、個人によって語られる事柄のその内容の分析にとどまらず、個人がそのような戦争体験を語ることににおけるその意味の分析に重点をおいた研究を行なってきた。たとえば、かつ

て兵士であった戦争体験者の加齢とそのライフヒストリー全体のなかで戦争体験が語られる比重の変化、戦争体験の意味付けと社会の役割、戦争体験の語りと個人のアイデンティティの問題などである。戦争体験の語りに関する資料論的な研究の意義について、新たな分析視点の獲得と深化および日本人研究者の分析の傾向性と特徴とが再認識されることができて有意義な研究集会であった。

そして、この研究集会の成果を基礎に、翌二〇〇六年度には幸いにもJSPS(日本学術振興会)の助成を受けることができて、あらためて国際研究集会を開催することができた。トニー・ウォルター(パース大学・教授)「忘却、追悼、そして喪われた悲哀」、ヴェレド・ヴィニツキ・セルーシ(ヘブライ大学・教授)「記念の本質」、ジェフリー・K・オリック(バージニア大学・教授)「悔恨の価値―ドイツの教訓―」、エフラート・ベン・ゼーブ(ルビン・アカデミックセンター・助教授)、エドナ・ロムスキー・フェダー(ヘブライ大学・助教授)、イヤル・ベン・アリ(ヘブライ大学・教授)「受け入れられる物語を語ること―伝記と戦争体験記における世代の記憶が表現するもの―」、一ノ瀬俊也(国立歴史民俗博物館・助手)「日露戦争の戦跡」、マイケル・ルツケン(フランス国立東洋言語文化研究所・教授)「近代史における写真の利用について―山端による長崎の写真(一九四五年八月)の場合―」、ジェームズ・E・ロバートソン(東京女学館大学・教授)「命<sup>スナ</sup>どう宝―沖縄の戦争と平和の歌にみられる文化の記憶と政治―」、関沢まゆみ(国立歴史民俗博物館・助教授)「『戦争と死』の記憶と語り―フランスの二つの事例より―」、ジョン・クラマー(上智大学・教授)「トラウマの社会学―社会的暴力に関する記憶の想起、忘却、修正―」など、社会学の記憶論を中心として、文化人類学、歴史学、美術史、民俗学の各分野からの事例研究など、合計九つの研究発表が行われた。欧米の現在第一線の研究者の参加を得て斬新な研究視点が提示された。たとえば、戦闘を生き

残った人々の記憶の形態には、忘却と記憶だけでなく哀悼の不可能性 (inability to mourn) を含めた三種類があるという指摘。また、社会的記憶の分析理論として、従来の機能主義による記憶と社会統合の視点でなく、新しい視点として社会のどのグループが記憶をめぐって対立するかという対立理論による視点の提示、そしてM. ウェーバーのいう「責任倫理」にもとづく悔恨の政治の樹立の可能性、さらには、キャノニカル・ゼネレーション (canonical generation) と呼ばれる、時代のエートス (value success model) を体現する記憶の世代の問題、等々である。

討論では、(1) 一九七〇年代から九〇年代以降のメモリースタディズの現在(2) 集合的記憶と個人的記憶をめぐる基本的な問題(3) 戦争体験の記憶と世代、などが論題となった。とくに(2)では、これまでの記憶論においてその分析の中心は memory であり、それを一種のモノ (thing) ともしようべき固定したものとみなしてきた点を反省し、新しい分析概念を得るために、記憶のプロセスに注目することの必要性が強調された。それによって従来集合的記憶として包括的にとらえられてきた記憶の多様な態様がより正確に理解できるという新しい研究視点が提示された。

この国際研究集会では、戦争体験の記憶には大別して、国家や集団の記憶と個人の記憶との二種類があり、近年、記憶の表象としての語り (narrative) と記録 (document) と表象物 (monument) がとくに注目されているが、そのうちもつとも資料論的な検討および方法論的な検討が求められているのが語りである点に留意しながら戦争体験の記憶の表象について、日本の事例と欧米諸国の事例との比較と分析、そして次世代への戦争体験の記憶の継承をめぐる日本と欧米諸国との比較と分析という二つの課題を含みおきながら、戦争体験の記憶と表象のあり方がそれぞれの社会でどのような特徴を有するのかを考えてみることを目的とした。

戦後六〇年を迎えた日本では、アジア太平洋戦争の体験者の高齢化と戦争体験の風化が進行している。その一方、アジアやヨーロッパをはじめ国際社会では、歴史認識をめぐる議論が重ねられてきている。そこで本研究集会ではまた、記憶と忘却、謝罪と悔恨、惨劇とトラウマ、など戦争体験の記憶と語りをめぐるさまざまな問題についての海外研究者の最新の研究成果を提示してもらい、同時に日本側研究者の見解もあわせて提示しながら幅広い議論を展開させることができた。

(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)